

## 事例報告

## 日本赤十字九州国際看護大学図書館における利用教育について

伊東 泰子

ITO Yasuko (The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing Library), User Education at the Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing Library. *Nursing and Information* 2009;16:51-54

キーワード：利用教育, 文献検索, 情報リテラシー

## I. はじめに

現在, 大学図書館における利用教育(指導)については, “情報リテラシー” という概念と関連づけて語られている。情報の入手だけでなく, 情報整理や情報発信までも視野に入れた情報教育の中であって, 従来から行ってきた図書館の利用教育をどう位置づけるのが求められているといえるが, 日本赤十字九州国際看護大学図書館(以下「当館」という。)においても, 開学から今日まで, その方法について模索してきた。

本稿では, これまで単発的に行っていた図書館の利用教育を, より効果的なものにするため, 学年別に計画的・段階的に体系化を試みた事例について報告する。

## II. 学年別ガイダンス実施までの経過

日本赤十字九州国際看護大学(以下「本学」という。)は, 2001年に開学し, 2008年度で8年目を迎えた。学部, 研究科ともに看護学の単科大学である。2007年4月に大学院看護学研究科看護学専攻(修士課程)を開設した。

開学初年度から, 図書館の業務としてオリエンテーションや情報検索ガイダンスを行ってきたが, 実施対象と内容については試行錯誤の連続であった。データベースの検索指導は, 当初, 教員の要請に応じてその都度個別に実施していたため, 学生の間に検索技術の差が生じていた。また, 開学から2006年までの6年間には, ガイダンスを実施しない学年もあった。例えば1年次にOPACの検索方法を教えた後は, 3年次で雑誌記事のデータベースを教えるまで, 特に何のガイダンスも行っていなかった。

実施時期についても, 図書館員が授業の空き時間を見て独自に判断して決めていたため, 実習や定期試験などのスケジュールへの配慮や学生のニーズの把握が不足し

ており, 参加率の低さが問題であった。ガイダンスの内容も, 個々のデータベースの検索技術の習得を重視したものであったので, 学生は課題に応じた検索ツールの選択ができず, あるテーマについて調べる際に, まず図書で調べた方がいいのか, データベースで雑誌の文献を検索した方がいいのかわからない, というような状況が見られた。

これらの問題点をもとに, 2007年度に本学の図書館運営委員会で見直しを行い, 学年ごとに段階的で計画的なガイダンスを行うこととした。カリキュラムの中には組み入れないものの, 関連する授業を明確にし, 担当教員と連携してガイダンスを実施することや, そのPRも授業の前に行って, 授業との関連性について学生の認識を高めることを図った。PRは, 従来, ホームページと掲示によっていたが, これに加えて, 図書の貸出の際にチラシを配布し, 返却スリップに案内を印刷したり, 未参加者にはメールを送るなどの手段を用いた。

また, 事前に教員にテーマを設定してもらい, 図書館でそのテーマに基づいたパスファインダーを作成して, 課題解決型のガイダンスも行うことにした。学生には, 個々の検索ツールやデータベースの特徴を把握したうえで, 具体的な課題に即したツールを選択し, 解決に至るまでの過程を体験できるような内容とした。

## III. 学年別ガイダンスの実際

## 1. 1年生

<入学時>

図書館オリエンテーション

【時間】20分

【内容】

- ・館長のメッセージ
- ・図書館施設とサービスの紹介

## &lt;前期&gt;

## 図書館利用ガイダンス

【時間】90分

## 【内容】

- ・DVD『情報の達人』第1巻「図書館へ行こう！：インターネット時代の情報活用入門」\*<sup>1</sup>を上映
- ・学内所蔵資料の探し方（OPAC）
- ・マイライブラリ活用法

## &lt;後期&gt;

## 情報検索ガイダンス

【時間】90分

【関連科目】基礎力総合ゼミナール

## 【内容】

- ・DVD『情報の達人』第3巻「レポート・論文を書こう！：誰にでも書ける10のステップ」\*<sup>2</sup>を上映
- ・WebCAT Plus, 想 - IMAGINE Book Search \*<sup>3</sup>などを用いたテーマ関連図書の検索
- ・学内所蔵資料の探し方（OPAC）
- ・CiNii（NII 論文情報ナビゲータ）
- ・朝日新聞『聞蔵 デジタルニュースアーカイブ・フォーライブラリー』
- ・インターネットの関連サイト

1年次の前期に行うオリエンテーションとガイダンスは、新入生全員に対して、最低限、図書館の施設やサービスを印象づけることを目的にしている。OPACやマイライブラリ機能について説明し、学内にある図書や雑誌を探す方法について紹介するとどめる。

その後、後期には、この期間に開講される基礎力総合ゼミナール（図1）の時間中に情報検索ガイダンスを行う。この授業は、1学年を1クラス15名程度のゼミに分けたもので、各ゼミの担当教員の専門は、法学や医学、社会保健学などさまざまである。ガイダンスにあたっては、教員ごとに相談してテーマを決めてもらい、図書館でパスファインダーを準備する。ゼミによっては、そのテーマでレポート提出が義務づけられるので、学生も漠然と資料を検索するのではなく、目的を持って課題に取り組むことができる。

パスファインダーは、①テーマに関連する図書をWebCAT Plus等で検索、②OPACによる学内の所蔵資料を検索、③雑誌記事、④新聞記事、⑤インターネットの関連サイトの情報を検索、という構成となっている。関連サイトの説明を行う際には、官公庁の統計データや

白書などの検索方法に関しても説明をする。学生は、インターネットに精通しているように見えて、こうした情報源を知らないことが多い。これらについて教えるとともに、Web上の情報を引用する際の注意事項などにも簡単に触れる。

図書館員にとっては、パスファインダーを作成する過程で、自館に不足している参考図書がわかり、また、分野による所蔵資料の偏りにも気付くなど、蔵書構成を見直す良い機会ともなっている。

リベラルアーツ・専門基礎科目【人間】

履修科目コード	H1119000		担当教員	池田 正人、大塚 幹、岡村 純、 横田 由紀子、坂本 洋子、因 京子、 徳永 哲、吉永 宗義	
授業科目名	基礎力総合ゼミナール		開講年次	1年後期	2
必修選択	必修	授業形態	演習	時間数(単位数)	30(1)
授業の目的	ライティングリテラシー、プレゼンテーションスキルを踏まえ、自ら問いを立て、答えを見つけ、レポートとしてまとめ、プレゼンテーションする、という基礎力を総合的にみがく。				
授業概要					
<p>上記の目的を達成するため、ゼミに分かれて行う。            テーマの内容や進め方は各ゼミの担当教員と話し合っ決めて。            授業ではどのゼミも共通して次のことを目指す。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 事実に基づいて論理的の議論を展開できるようになる。</li> <li>2. 感想ではなく考察を、説得力を持って展開できるようになる。</li> <li>3. 図書館の利用、文献検索、インターネットの正しい利用方法を身につける。</li> <li>4. 文献の正しい引用の仕方を身につける。</li> </ol>					
先行履修科目					
テキスト	各教員が必要に応じて指示する。				
参考文献	各教員が随時指示。				
評価方法	出席、授業への参加、レポート、プレゼンテーション等を参考にして総合的に評価する。				
メッセージ	本をたくさん読みましょう。				

図1 2008(平成20)年度 日本赤十字九州国際看護大学学生便覧抜粋

## 2. 2年生

## &lt;前期&gt;

## データベース検索ガイダンス

【時間】90分 ※2008年度は2回実施

【関連科目】基礎看護学実習

## 【内容】

- ・和文データベース  
医中誌 Web版, JDream II

2年次には、以前はこのようなガイダンスを実施していなかったが、病院での実習の後、レポートを作成する際に雑誌記事の利用が必要である、という教員の意見をもとに実施することになった。雑誌記事検索については、

1年次でCiNiiを取り上げているが、ここでは看護分野についての専門的なデータベースの検索方法を学ぶ。実習や授業との関連でも、より有用であるといえる。

### 3. 3年生

<前期>

データベース検索ガイダンス

【時間】60分 ※データベース毎に2,3回(2008年度は計14回実施)

【関連科目】看護研究方法

【内容】

- ・和文データベース  
医中誌 Web版, JDream II, CiNii
- ・欧文データベース  
PubMed, CINAHL Plus with Full Text

<後期>

データベース検索ガイダンス

【時間】60分 ※卒業研究テーマの決定時期(2月)に2回実施

【関連科目】看護研究方法

【内容】

- ・データベース検索方法の復習
- ・演習と質問中心

3年次前期の和文・欧文のデータベースガイダンスについては、期間中の実施回数も最も多く、図書館員も力を入れて取り組んでいるものである。2008年度の参加率は、医中誌が一番多く74%、一番少ないPubMedとCINAHLが17%であった。

後期には、前期に実施した内容の復習的なガイダンスを実施する。これは演習と質問が中心である。この時期は、卒業研究のテーマを決定する頃でもあり、参加する学生の意欲も高く、検索方法に関するかなり具体的な質問が出るのが特徴である。

### 4. 4年生

データベース検索ガイダンス

【時間】60分 ※卒業研究に向けて、4月中に1回実施

【関連科目】卒業研究

【内容】

- ・データベース検索方法の復習
- ・演習と質問中心

オーダーメイドガイダンス

【時間】予約制で個別に実施

【内容】

- ・研究テーマに合わせたデータベース検索支援

3年次と関連科目が変わるが、内容は3年次後期に行ったものとほぼ同じく、復習的なものである。このほか、2008年度に行った新たな試みとして、オーダーメイドガイダンスと称した予約制での個別のガイダンスを行った。数名の学生が、卒業研究のテーマに応じてアドバイスを求めてきたが、予想外の質問もあり、1人にかかる時間も長時間になる傾向にある。これについては、図書館員の知識と経験によって対応に差が出るのが考えられる。

### 5. 大学院生

<入学時>

図書館オリエンテーション

【時間】20分

【内容】

- ・図書館施設とサービスの紹介
- ・学内所蔵資料の探し方(OPAC)
- ・マイライブラリ活用法

入学時のオリエンテーションの後には、個々の要望や時間に応じて、柔軟にガイダンスを行っている。これは、大学院生のデータベースの検索技術に個人差があることや、正規の授業時間以外で、全員が都合のよい時間に一斉に行うことが難しいためである。

### IV. 考察

以上の実践の中で、まず、適切な時期に適切な内容のガイダンスを行うことが重要だということがわかった。例えば、3年生の後期の復習ガイダンスは、事前PRの期間が短かったにもかかわらず、参加者も多く、学生からは「春休みに文献収集をするのに役に立った」と好評であった。2月から3月にかけては卒業研究のテーマを決める時期であり、卒業研究に必要な文献の収集も、3年生後期の3月から数ヶ月で行う傾向がある。この時期のガイダンスの実施は、図書館運営委員会でアドバイスをを受けて決めたものであるが、学生のニーズに応じて、実施時期を適宜見直すことが重要だと感じた。このほか、実際にガイダンスを受けた4年生や卒業生に、いろいろ

どのデータベースを教わりたかったかを聞いて参考にしている。

また、漠然と検索方法についてガイダンスを行うのではなく、授業との関連のなかで、テーマを設定して行うことが効果的であった。レポートなどの課題が提示されていない状態では、情報検索もなぜ必要なのか学生は実感できず、しばらくすると検索方法を忘れてしまう傾向にある。ゼミなどの課題と関連づけることで、情報ニーズが明確になり、学生の理解度もより深まるのではないかと考えられる。

さらに、全体を通して、ひとつのデータベースについて、学年を隔てて複数回ガイダンスの機会を設け、より細部の機能にわたって繰り返し習得できるよう配慮した。これはいわゆる「らせん型」の指導（同じ内容を少しずつ高度にしながらかつ繰り返し指導していく<sup>1)</sup>）であり、学生の理解も深まって効果的であった。

また、ガイダンスの時期や内容などについて、さまざまな局面で、教員との情報交換や連携の必要性を痛感した。図書館が情報支援という形で授業に参加し、それによって学生の学習成果が向上すれば、図書館の利用教育の意義が伝わり、存在意義をアピールすることにつながるのではないだろうか。また、これには図書館員のスキルアップも重要である。2008年度には、1年生を対象として開講された「プレゼンテーションスキル」の科目を、職員2名が聴講した。自らの研修としてはもちろんであるが、学生が実際にどのような授業を受け、どのように資料を使っているのか、その一端を知ることができたのは大きな収穫であった。

## V. おわりに

今後は、個別の課題やテーマに応じた、よりきめ細やかなガイダンスを計画しているが、そのためには、業務の中で簡素化できる部分を簡素化し、ガイダンスに重点を置く必要がある。また、昨今話題となっているように、図書館の一部をラーニングコモンズとし、大学院生などに情報検索の支援者として協力を求めることも視野に入れて、ガイダンス業務の効率化を図りたいと考えている。

情報リテラシー教育を体系的に行うためには、図書館だけでなく、大学全体で取り組む体制と組織づくりが必要であることがすでに指摘されている<sup>2)</sup>。当館の取り組みは、現在のところ情報収集方法についての指導や支援にとどまるものであり、情報の整理や発信の部分には及んでいない。今後、全学的な情報リテラシー教育体制の

構築に向けて、その枠組みの中で専門的な支援が行えるよう、学内での連携と自己の研鑽に努めていきたい。

## 付記

本稿は、日本看護図書館協会2008年第38回研究会(2008年8月7日 於：聖マリア学院大学)において事例発表した「日本赤十字九州国際看護大学図書館における学年別情報検索ガイダンスの取り組み」の内容を加筆・修正したものです。

## 参考文献

- 1) 野末俊比古. 情報リテラシー教育と大学図書館: 「利用教育」から「指導サービス」へ. 図書館雑誌, 2008; 102(11): 762-5.
- 2) 逸村裕, 竹内比呂也編. 変わりゆく大学図書館. 勁草書房, 2005.
- 3) 日本図書館協会図書館利用教育委員会編. 図書館利用教育ハンドブック: 大学図書館版. 日本図書館協会, 2003.

## 注

- \*1 仁上幸治, 野末俊比古監修. 情報の達人. 紀伊國屋書店, 2007, 全3巻.(DVD).
- \*2 前掲1
- \*3 想—IMAGINE Book Search  
<<http://imagine.bookmap.info/>>